

古フランス語における 付加形容詞と名詞の語順に関する考察

— 文法書記述の疑問点, 矛盾点に着目して —

今 田 良 信

0. はじめに

筆者はこれまで、今田(2009), (2010a), (2012a), (2012b), (2013a), (2013b)において、フランス語における品質形容詞(*adjectif qualificatif*)の付加的用法(以後、単に形容詞ないし付加形容詞(*adjectif épithète*)と呼ぶ)の語順、すなわち形容詞(A)と名詞(N)の相対的順序について、古フランス語と現代フランス語の間の「語順構造の変換」¹⁾あるいは「語順構造シフト」²⁾の視点から扱ってきた。その中で、概ね巨視的見地からであるが、古フランス語ではAN語順が、現代フランス語ではNA語順が、原則的ないし一般的であるということを前提として論を進めた。

このことは、古フランス語については、例えば、Raynaud de Lage(1975), p. 39 では、
“; cependant l'adj. épithète précède très généralement le nom.”

「しかしながら、〔古フランス語においては〕付加形容詞は非常に一般的に名詞の前に来る。」(拙訳; 下線部筆者, 以下同様)

とされ、島岡(1982), p. 223 でも、

「〔付加形容詞の位置については〕古フランス語では名詞の前に置かれることが多かった。ゲルマン語の影響によるものと思われる: *neyrns charbouns*(黒い炭), *blanches stoles*(白いストール), *crestienne loi*(キリスト教の掟), *florentin couvent*(フィレンツェの僧院), *philosophique repous*(哲学的なやすらぎ), *veuve dame*(未亡人), *grecque beauté*(ギリシア的美)。」(〔 〕内筆者補足, 以下同様)

と述べられており、現代フランス語については、佐藤, 他(1991), p. 95で、付加形容詞の位置に関して、

「形容詞がその本来の働きをしている時、即ち、名詞のあらかず事物について、同種の他のものと異なる性質 (*la ligne droite* 直線/*la ligne courbe* 曲線) や、置かれている状態 (*la brabche cassée* 折れた枝) を示している時は、名詞の後に置かれる。言いかえれば、形容詞の原則的位置は名詞の後である。」

と指摘されていることなどに代表されるように、比較的多くの文法書において、基本的にこれらと同様か、近い記述がなされていることに依拠している³⁾。しかしながら、実際の

形容詞の振る舞いを見れば、現代フランス語でも、上述の「形容詞の原則的位置は名詞の後である」という原則だけでは済むはずもなく、この原則を破って形容詞を名詞の前に置く場合がかなり頻繁に見られる⁴⁾。同じように、古フランス語においても、実際のテキストに当たってみると、「付加形容詞は非常に一般的に名詞の前に来る」という原則を破り名詞の後に置かれる形容詞が散見される。しかも、原則以外の如何なるルールに則ってそうになっているのかが、俄には分からないのである。従って、Rickard(1989)のように、形容詞の位置は決まっていなかったとする記述もある⁵⁾。いずれにせよ、形容詞と名詞の配置の実態は、単一の原則だけで説明できるほど単純でないことは確かである。

そこで本稿では、古フランス語における付加形容詞と名詞の語順に関して、実際のテキストに照らし、必要に応じて具体的事例を示しつつ、文法書の記述の中に見出される疑問、記述とテキストの実相とのずれ、さらに記述どうしに見られる矛盾、などの問題点を詳らかにし、検討してみたい。

1. 本稿で用いる資料体について

本稿では、古フランス語の具体例に当たる資料体として、13世紀前半に成立したとされる下記の散文作品2点を使用することにする。

M.A.: *La Mort le roi Artu*, Roman du XIII^e siècle, éd. J. Frappier, TLF, Genève/Paris: Droz/Minard, 1964. [現代語訳: *La mort du roi Arthur*, traduit par M. Santucci, Paris: Honoré Champion, 1991.]

Q.G.: *La Queste del saint Graal*, Roman du XIII^e siècle, éd. A. Pauphilet, CFMA, Paris: Honoré Champion, 1980². [現代語訳: *La Quête du Saint Graal*, traduite par E. Baumgartner, Paris: Honoré Champion, 1979.]

2. 文法書の記述の問題点

以下、文法書の記述を検討しつつ、浮かび上がった問題点を挙げて行くことにしたい。なお、その問題点には、便宜上それぞれ番号(①, ②, …)を振っていくことにする。

2. 1. 前置例と後置例の延べ用例合計数と形容詞別異なり語数についての記述

古フランス語の文法書の中で、付加形容詞と名詞の相対的順序の問題を比較的詳しく扱っているものとして、Moignet(1979)を挙げるができる。ここでの問題に関する記述の最初には、先ずp. 345に、

“L’adjectif qualificatif peut être antéposé ou postposé au substantif. Sa place prend une signification assez précise.”

「品質形容詞は名詞の前にも後にも置かれ得る。その置かれる位置は、かなり詳細な意味を帯びている。」(拙訳)

と述べられており、0. で取り上げた文法書と少し異なり、形容詞が名詞の前に置かれる

ことを単純に原則的ないし一般的であるとはしていない。その上で、形容詞が名詞の前に置かれる場合について、

“Antéposé, l’adjectif signifie une qualification précoce qui classe le substantif, avant sa définition précise, dans certaines catégories générales: grandeur, valeur, puissance, beauté, cadre affectif, rang social, âge, sainteté, légitimité, etc. Les adjectifs le plus couramment antéposés sont *granz*, *petiz*, *bons*, *maus*, *beaus*, *hauz*, *riches*, *gentiz*, *sainz*, *vieux*, *juenes*, *mestre*, *droiz*, *chiers*, etc. Ces mots fonctionnent comme des sortes de classificateurs.”

「前置される場合、形容詞は、詳細な〔意味の〕限定以前に、大きさ、価値、強さ、美しさ、情意性、社会的地位、年齢、神聖さ、正当性など、あるいくつかの一般的範疇へと名詞を分類する早期修飾⁶⁾を意味する。最も頻繁に前置される形容詞は、*granz*, *petiz*, *bons*, *maus*, *beaus*, *hauz*, *riches*, *gentiz*, *sainz*, *vieux*, *juenes*, *mestre*, *droiz*, *chiers*, などである。これらの語は一種の類標識⁷⁾として働く。」(拙訳)とし、*Q.G.*の1-9頁、および*M.A.*の1-25節に現れる、形容詞が名詞に前置された延べ用例数が、それぞれ58例、および65例であることと、その中に含まれる形容詞別延べ用例数の内訳が、すべてではないが、示されている。しかし、①前置例と後置例それぞれにおける延べ用例合計数と形容詞別の異なり語数の対比については何も述べられてはいない。

次に、形容詞が名詞の後に置かれる場合について、

“Postposé, l’adjectif apporte au substantif une caractérisation tardive, le plus souvent particularisante.”

「後置される場合、形容詞は、大抵の場合特殊化を行なう、晩期特徴づけ⁸⁾を名詞にもたらす。」(拙訳)とし、*M.A.*および*Q.G.*から、特に範囲は定めず、*la Table Reonde* 「円卓」のような固有名詞句を含め、8例の用例が示されている。

しかも、Moignet(1979), p.346には、「大抵は前置される形容詞が後置されることも有り得る。その場合、形容詞は限定的(restrictif)かつ記述的(descriptif)な特徴づけの価値を帯びる。」として、

Q.G. 5/14 un perron *grant* 「大きな岩」
などの事例が挙げられている。

そこで、この説明全体の骨子を纏めれば、形容詞の位置はかなり詳細な意味を帯びる、ということで、前置される場合には、形容詞は、詳細な〔意味の〕限定以前に、名詞をあるいくつかの一般的範疇へと分類する早期修飾を意味し、一種の類標識として機能する。一方、後置される場合には、形容詞は、特殊化を行なう晩期特徴づけを名詞にもたらすということになる。これは換言すれば、前置と後置という位置の違いそのものに「一般化」と「特殊化」とでも言うべき機能分担があり、それにより形容詞の位置が選ばれているこ

とになる。しかし、本当にこのような単純とも言い得る位置の機能分担だけによって、テキスト上の形容詞の意味の実相を説明できるのかという疑問は拭えない。

2. 2. 色彩形容詞の位置に関する記述

Moignet(1979), p. 346によれば、色彩形容詞について、

“Les adjectifs signifiant les couleurs sont le plus souvent postposés.”

「色彩を意味する形容詞は、大抵の場合、名詞の後に置かれる。」(拙訳)

とし、以下の箇所の事例を引用している⁹⁾。

Q.G. 7/23 un chevalier a unes armes vermeilles 「真紅の甲冑を着けた騎士」
(拙訳)

Q.G. 8/ 5 une cote de cedal vermeil 「真紅の絹の寛衣」(拙訳)

Q.G. 8/ 6 un mantel vermeil 「真紅の外套」(拙訳)

M.A. 23/13 deus chevaliers armez d'unes armes vermeilles 「真紅の甲冑を着けた
2人の騎士」(拙訳)

M.A.:24/ 2 nuiz obscure 「どっぷり暮れて」(拙訳)

その後、続いて、

“Mais l'adjectif *blans* est antéposé dans : … ”

「しかし、形容詞 *blans* 「白い」は〔以下の事例〕において前置される。」(拙訳)

として、次の2例を引用し、

Q.G. 7/20 une *blanche robe* 「白い衣」(拙訳)

Q.G. 8/ 7 un *blanc hermine* 「白いアーミン皮」(拙訳)

前者については「形容詞は、感覚表記的価値のみを持つわけではない」とし、後者については「*blanc* は本質を示す形容語である」と説明している。*blanc* の前置例については、Moignet(1979)だけでなく、既述の島岡(1982)でも「*blanches stoles*(白いストール)」という例が挙げられている。さらに、Q.G.には、上述の2例以外に次のような例も見られる。

Q.G. 15/20 un *blanc samit* 「白い絹」(拙訳)

しかし、Moignet(1979)では指摘されていないものの、*blanc* については次のような後置例も見られるのである。

Q.G. 12/23 un *pallefroi blanc* 「白い儀仗馬」(拙訳)

それゆえ、出現頻度の問題は別として、②色彩形容詞であっても、少なくとも前置と後置の間で「ゆれ」の見られるものはあることが明らかになった。しかし、これはどのように考えれば良いのであろうか。前置と後置の違いは、色彩の違いによるというよりも、上述のQ.G.7/20, 8/ 7に対するMoignet(1979)の説明にあるように、同じ色彩でもその意味する内容の違いに求めるべきなのであろうか。ただし、その場合でも、前置と後置という位置そのものが持つ価値、すなわち語順によって表されるものが何であるのかという根本

的問題は以前として残ることになる。

2. 3. 形容詞の前置と後置の間のゆれに関する記述

Moignet(1979)でも、前節と同じ p.346で、前置と後置の間のゆれを問題にしている。

“Il y a hésitation entre l’antéposition et la postposition pour certains adjectifs. Ainsi, dans *La Queste*, 1-9, on lit trois fois l’expression *noviaux chevaliers*(3/11, 3/15, 9/23) et deux fois *chevaliers noviaux*(9/13, 9/24). On a même les deux constructions dans la même phrase:

9/22 Je nel sai mie très bien, fet Lyonel, fors tant que ce est cil qui hui a esté *noviax chevaliers*, que messire Lancelot fist hui *chevalier novel* de sa main.”

「いくつかの形容詞については前置と後置の間でゆれ¹⁰⁾がある。例えば、『(聖杯の)探索』、1-9 頁の中には、*noviaux chevaliers*という表現が3回、*chevaliers noviaux*という表現が2回登場する。同一文の中にこの2つの表現が見られることさえある：9頁22行 リヨネルは「私はその者がその日新しく騎士に叙され、ランスロー殿が自らの手で新任の騎士に叙されたということ以外はよく存じません」と言った。」(拙訳)その後、Moignetは、この2つの言い回しは厳密には同義ではないとし、前置例*noviax chevaliers*の場合には、その特性は動作的(*opératif*)であり、*noviax*は、ほぼ副詞的意味(「新しくなった騎士」)を持つのに対し、後置例 *chevalier novel*の場合には、結果的(*résultatif*) (「新しいその(=騎士の)性質を持った騎士」)であると説明している。

この区別の基準が何れの事例にも当て嵌まるものなのかどうかは検証の必要があろうが、その前に、この基準自体が明快とは言い難いことが問題であろう。また、③何らかの意味上のニュアンスの差はあるにせよ、やはり、色彩形容詞に限らず一般的に形容詞の統語的側面の問題として位置のゆれが存在することは否定できまい。

2. 4. 形容詞の位置が表わす意味に関する記述どうしの矛盾点

最後になるが、形容詞の前置と後置の間で、意味の相違を説明しにくい事例について、Moignet(1979), p.346には、次のように述べられている。まず、

“Les adjectifs de sens affectif sont construits assez librement.”

「情意的意味を持つ形容詞はかなり自由に組み立てられる」(拙訳)として、次の例が挙げられている。

Q.G. 4/12 *merveilleuse aventure* 「不思議な出来事」(拙訳)

Q.G. 7/11 *si merveilleuse aventure* 「それほど不思議な出来事」(拙訳)

Q.G. 5/16 *aventure merveilleuse* 「不思議な出来事」(拙訳)

その後続けて、

“L’antéposition, qui assimile l’adjectif à un classificateur, semble produire un effet de plus grande expressivité.”

「形容詞を1つの類標識と同等に扱う〔形容詞の〕前置は、最も大きな表現性の効果を生むように思われる。」(拙訳)

と述べられているのであるが、この指摘を他の文法書の記述と比べてみると、大きな矛盾点が浮び上がってくる。そこで、Ménard(1988), p. 118に示された、付加形容詞の位置に関する次の記述を見られたい。

“En AF, dans les textes en prose l’adjectif épithète est couramment placé avant le nom: le déterminant précède le déterminé. Est-ce sous l’influence germanique? Est-ce une survivance du latin où l’adjectif précédait le substantif lorsqu’il lui était étroitement uni comme épithète(*pulchra domus*)? Quoi qu’il en soit, le fait de placer l’adjectif avant le nom est un usage très répandu qui n’implique aucune mise en relief particulière. En revanche, la postposition de l’adjectif est un tour expressif qui détache l’adjectif.”

「古フランス語の散文テキストでは、付加形容詞は頻繁に名詞の前に置かれる。すなわち、限定辞は被限定辞に先行する。これはゲルマン語の影響を受けているのであろうか? 形容詞が付加語として名詞に緊密に結びつけられている時に形容詞が名詞に先行していたラテン語(*pulchra domus*「美しい家」)の名残りであろうか? いずれにせよ、形容詞を名詞の前に置くことは、何ら特別な際立たせも含意しない、非常に有り触れた用法である。それに反して、形容詞の後置は、形容詞を際立たせる、表現性豊かな言い回しである。」(拙訳)

ここで問題となるのは、④Moignet(1979)もMénard(1988)も同じく、古フランス語における名詞に対する形容詞の位置について述べているのにもかかわらず、Moignet(1979)の方は、前置された場合に最も大きな表現性の効果を生むと述べ、一方、Ménard(1988)の方は、後置された場合に形容詞が際立たせられ表現性豊かな言い回しになると、ちょうど真逆のことを言っているように見える点である。さらに、Moignet(1979)とMénard(1988)の主張のどちらが正しいのかということも疑問ではあるが、それ以前にもっと本質的な問題として、2. 2. でも触れたが、⑤前置と後置という2つの位置の違いのみによって区別し得る形容詞の意味の区分けが本当に可能なのか、可能とすればそれは一体何なのか、言い換えれば、形容詞と名詞の相対的順序によって表されるものは一体何なのかという根本的問題に行き着くのである。

3. 問題点の考察

さて、前節で指摘した問題点をもう一度整理して簡略に示せば、次の①～⑤の5点にまとめることができよう。

- ①前置例と後置例それぞれにおける延べ用例合計数と形容詞別異なり語数の対比の問題
- ②色彩形容詞の位置のゆれの問題

③付加形容詞一般の位置のゆれに関する問題

④付加形容詞の位置に関して前後正反対の説明をしているかのように見えるMoignet(1979)とMénard(1988)の記述のずれの問題

⑤前置と後置という位置の相違によって区別される価値に関する問題

以上のうち、②、③、④、⑤については、紙幅の都合もあり、本稿の中ですぐ解決することは難しいので、ここでは、これら5点のうち、①についてのみ検討してみたい。

そこで、限られたものではあるが、Moignet(1979), p.345に示されたテキストの範囲に合わせて、Q.G.の1-9頁、およびM.A.の1-25節に現れる、単独の付加形容詞の原級¹¹⁾についてのみ、改めて筆者が用例数を数え、纏めたものが〔表1〕、〔表2〕である。下線を付した形容詞は、同一資料内で前置と後置との間でゆれの見られた形容詞である。

〔表1〕 Q.G.付加形容詞用例数(1-9頁)

〔表2〕 M.A.付加形容詞用例数(1-25節)

	前置例		後置例	
形容詞別延べ用例数	<u>granz</u>	14	reonz	6
	biaus	9	perilleux	4
	hauz	8	vermeiz	4
	sainz	4	<u>noviax</u>	2
	<u>noviax</u>	3	<u>granz</u>	1
	riches	3	<u>merveilleux</u>	1
	blans	2	precios	1
	<u>merveilleux</u>	2	prochains	1
	bons	1		
	estranges	1		
gentiz	1			
mestre	1			
計	49		20	

	前置例		後置例	
形容詞別延べ用例数	granz	35	reonz	3
	biaus	10	destres	2
	bons	6	noviaus	2
	gentiz	3	vermeils	2
	derriens	2	anglesches	1
	hauz	2	crestiens	1
	fols	2	<u>droiz</u>	1
	seinz	2	estranges	1
	<u>droiz</u>	1	morteus	1
	lointeins	1	sauvajes	1
riches	1	senestres	1	
vieuz	1	oscurz	1	
計	66		17	

これらの表からは、次の点が指摘できよう。

先ず、Q.G.では、前置例の延べ用例数は49例、後置例の延べ用例数は20例であるから、それらを合わせた延べ用例総数69例の百分率で見ると、前者は71%、後者は29%を占め、延べ用例総数から見た付加形容詞の出現頻度は、前置例が後置例の約2.5倍ということになる。一方、形容詞別の異なり語数の点から見ると、前置例の形容詞は12種、後置例の形容詞は8種であり、そのうち両者の間でゆれているものが3種ある。百分率で見ると、形

容詞の異なり語総数は17種となり、前置例は71%、後置例は47%で、前置例と後置例がゆれて(=重なって)出現するものが18%ということになる。

次に、M.A.では、前置例の延べ用例数は66例、後置例の延べ用例数は17例であるから、それらを合わせた延べ用例総数83例の百分率で見ると、前者は80%、後者は20%を占め、延べ用例総数から見た付加形容詞の出現頻度は、前置例が後置例の4倍ということになる。一方、形容詞別の異なり語数の点から見ると、前置例の形容詞は12種、後置例の形容詞も12種であり、そのうち両者の間でゆれているものが1種ある。百分率で見ると、形容詞の異なり語総数は23種となり、前置例も後置例も52%で、前置例と後置例がゆれて出現するものが約4%ということになる。

以上を総合すれば、延べ用例総数から見た付加形容詞の出現頻度は、Q.G.では、前置例が後置例の約2.5倍、M.A.では、4倍であるので、この点からすると、「古フランス語では名詞の前に置かれることが多かった。」と言うことはできるであろう。一方、付加形容詞の異なり語数の点から見ると、Q.G.では、前置例は12種の71%、後置例は8種の47%で、ゆれている形容詞が3種の18%であり、M.A.では、前置例も後置例も12種の52%で、ゆれて出現している形容詞が1種の4%であるので、この点から見ると、Q.G.では、後置例よりも前置例が多くやや開きがあるものの、M.A.では、前置例と後置例に差はないということになる。

従って、今回の限られた範囲の小さな調査結果からではあるが、古フランス語において「付加形容詞は非常に一般的に名詞の前に来る」というのは、現時点では、延べ用例総数による付加形容詞の出現頻度の観点から見た場合に限られるということになる。

4. 今後の課題

以上、本稿での考察の結果、現代フランス語においてもそうであるが、古フランス語においても、付加形容詞と名詞の語順の問題は、一般的に言われているよりは、はるかに複雑で問題点も多く、なかなか一筋縄では行かないことが、改めてお分かりいただけたものと思う。今回は、資料体を定めて、その資料全体の数量的あるいは統計的処理は行わなかったため、あまりはっきりしたことは提示することができなかった。問題の所在については、ある程度詳らかにできたと考えるが、問題点の大方は宿題として残されることになった。残された問題点はいずれもすぐに答えが得られるような内容のものではないものの、今後、方法論なども工夫して解決を図れるように努めたい。

注

- 1) 今田(2010a), (2012b)を参照のこと。
- 2) 今田(2012a), (2013a), (2013b)を参照のこと。
- 3) 例えば, Wartburg(1971), p. 175などを参照のこと。

4) この点について、佐藤、他(1991), p.95では、本文中に示した引用文の直後に「この語順は、まず〈主部〉を与え次に〈述部〉を与える、あるいは、まず、〈テーマ〉を示して、次にそれへの〈コメント〉を付するという意味において、「前進的語順」(séquence progressive)と呼ばれ、論理的・客観的な語順ということができる。そして、この語順が一般的な原則となってしまうと(ほぼ17世紀)、この原則を破って、形容詞を名詞の前に置くことは、なんらかの理由に基づいたものとなる。その理由は、古くからの慣用(un beau château美しい城)、位置による意味の違い(un grand homme 偉人/un homme grand背の高い人)、形容詞がさらに、それ自身で補語を従えているというような文法的理由(un long tunnel 長いトンネル/un tunnel long de 5 kilomètres長さ5キロのトンネル)、単音節の形容詞は多音節の名詞の前という音調上の理由(le vieux français 古いフランス語)、形容詞の示す意味の感情的(つまり、非〈論理的〉)強調(d'incroyables difficultés 想像を絶する困難)など様々であるが、des difficultés incroyables との間の意味の違いを論理的に分析することが困難な最後のケースも含めて、原理的には、「形容詞+名詞」では、形容詞と名詞とが一体化して、意味上1個の単位を形成し(grand homme =grand-homme 偉人)、「名詞+形容詞」では、名詞と形容詞がそれぞれ自律的である(homme grand =homme/grand 背の高い男)とすることができ、別の言い方をすれば、前置された形容詞は、主観的、感情的な印象を示し(grand homme は、「人間としての大きさを感ぜさせる人」)、後置された形容詞は、客観的、論理的判断を示す(homme grand は「背の高い人」と言うこともできる。)と説明されている。

5) Rickard(1989), p.54によれば、「形容詞の位置は、全然決まっていなかった。」〔伊藤・高橋訳〕とある。この後、本文の2. で言及するMoignet(1979)の記述も、どちらかと言えば、この立場に近いかもしれない。

6) この訳語の原語であるune qualification précoce という用語は、この後に現われるune caractérisation tardive という用語と共に、実質的に何を意味しようとするのか、フランス語における名詞に対する形容詞の位置、すなわち前置と後置が表示する意味の一般性を述べているのか、その場合、それで形容詞の位置と意味に関するテキスト上の実態を本当に説明したことになるのか、現時点では定かではないのであるが、一応、対の概念としてこのように訳出しておく。

7) Dubois J. et al. (1973), p.90を参照のこと。

8) 上記注4)を参照のこと。

9) なお、各事例の数字は、資料体M.A.では出現箇所の節数/行数を、資料体Q.G.ではページ数/行数を示す。また、問題となる名詞に下線を引き、形容詞はイタリック体にし、現代フランス語訳を参考にして日本語訳を付けるものとする。

10) 原語はhésitationであるが、意志や意図を排する意味でこの訳語を用いた。

11) 従って、Moignet(1979), p.345の調査のように、形容詞の比較級、動詞の現在分詞に

由来する形容詞 (e. g. : *Q.G.15/8 le soleil levant* 「朝日」 (拙訳))などは含まない。

参考文献

- 今田良信(2009): 「フランス語歴史言語類型論の試み」, 『ニダバ』, 38, pp.1-10.
- 今田良信(2010a): 「フランス語における言語構造の変換 — 歴史言語類型論の視点から —」, 『ニダバ』, 39, pp.31-40.
- 今田良信(2012a): 「フランス語における語順構造シフトの通時的方向性 — 語順類型論的観点から見えてくるもの —」, 『ニダバ』, 41, pp.117-126.
- 今田良信(2012b): 「古フランス語と現代フランス語の間に見られる言語構造の変換」, 『ロマンス語研究』, 45, pp.21-30.
- 今田良信(2013a): 「フランス語語順構造シフトの過程における一般言語学的言語作用」, 『ニダバ』, 42, pp.30-39.
- 今田良信(2013b): 「フランス語における語順構造シフトの通時的方向性 — 平叙文および疑問文のS/V語順構造の観点から見えてくるもの —」, 『ロマンス語研究』, 46, 10p. [印刷中]
- 佐藤房吉, 他(1991): 『詳解フランス文典』, 駿河台出版社.
- 島岡茂(1982): 『古フランス語文法』, 大学書林.
- Dubois J. et al. (1973): *Dictionnaire de linguistique*, Paris: Larousse.
〔福井芳男, 他編訳(1980): 『ラールス言語学用語辞典』, 大修館書店〕
- Ménard, Ph. (1988³): *Syntaxe de l'ancien français*, Bordeaux: Bière.
- Moignet, G. (1979²): *Grammaire de l'ancien français: Morphologie - Syntaxe*, Paris: Klincksieck.
- Perret, M. (1998): *Introduction à l'histoire de la langue française*, Paris: SEDES.
- Raynaud de Lage, G. (1975⁹): *Introduction à l'ancien français*, Paris: SEDES.
- Rickard, P. (1989²): *A History of the French Language*, London: Unwin Hyman.
〔伊藤忠夫・高橋秀雄訳(1995): 『フランス語を学ぶ人のために』, 世界思想社〕
- Wartburg, W. von(1971²): *Evolution et structure de la langue française*, Berne: Francke.